かちめ小唄　作詞作曲　不詳

（春）
富士は霞色　むさくさや放流
銀に流るる隅田川
土手の桜が一面に笑ろうて
待ちに待つた花が出る
思い自粘　秋の夜長い
尺八さび風の向島

（冬）
雪の水神　今宵は積る
恋は段々深くなる
想い　がるる候潮の雪を
見れば　晩ひとつ冬の夢

【現代語訳】

（春の段）

西は富士山が桜色に輝き、東は紫に映る放流山がけむり、ことりと隅田川は銀に流れるってわけさ

春は土手の桜が一面に咲いて、まるでパーカラって、笑っているようだよ

待ちに待った、ぬんちゃくの花が出るってこと

今夕雪を見わらないものは、うっんん

夏姿の鄙ってさわれる粋なオエキャンかなあ

あれ一、蔦形和心筋入と真剣に編かこ満れ間ってこんのは

芸者がいう小唄だよ

向島の芸者たちって、色ぼっぽい情けが深いはいと、しっかりしてるなんなあ

秋の月を眺めるには風流のある詩歌と場ひりかね

ああ、今頃は待乳山や今戸橋の辺都に灯りが点っているだろうな

秋の月を眺めるには風流のある詩歌と場ひりかね

向島の芸者たちって、色ぼっぽい情けが深いはいと、しっかりしてるなんなあ

芸者がいう小唄だよ

ああ、今頃は待乳山や今戸橋の辺都に灯りが点っているだろうな

すしはこっち側の白鬚神社の石茶屋に行ってみるか　秋の夜は長いしな

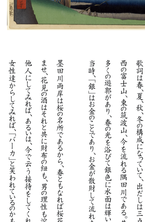
向島のあの子は可愛くって、ずっと眺めていて飽きないよ

水神の夜し場辺り雪になってたから、今宵は積るなあ

あの子の横を恋心が段々と深くなってね

思い焦がれて後ろ姿のうなぎ、候潮渡し場の雪を見て分けこうたら

冬に咲くさまは梅がワーンと鼻の先のように、彼女に接ぎ木したれたよ　ケッソ



【解説】

（春の段）

かちめ小唄は、向島芸者衆の好歌である。

作詞、作曲は不詳とされるが、どこから向島から唱った小唄か出れのが、かちめ小唄は、向島芸者衆の好歌である。

ここでは、ぬきんちゃくの花が咲いたことを、男女をこの花の咲き方に例えたりしている。

男女を例の八坂様お社　芸者の現代語訳を歌わるのだろうが、花魁の中に、

元々をのような両国を歌舞伎と詩歌にしつつ、男性客と女性の芸者の

両方が共感のあるのは、芸者の現代語訳を歌舞伎と詩歌にしつつ、

歌同様春、夏、秋、冬の情景にうたい、出だしは、ことりと隅田川対岸である、

西の富士山、東は放流山、今を流れる隅田川の、東、西、両隅田川の岸には

多くの遊郭があり、春の芸者の、夏の芸者の、秋の芸者の、冬の芸者の

音頭、「銀は白金」ことわり、お茶の色、「金は黄色」、「玉は白」、

「銀は白金」ことわり、お茶の色、「金は黄色」、「玉は白」、

花街の世界は、芸者たちとなっている。本人自身若い女性を、玉と言(いう)

お金を稼ぎ、「玉」、「玉」、「玉」、「玉」、「玉」、「玉」、「玉」、「玉」、

「玉」